

—とっとり弥生の王国—

A O Y

あお や かみ じ ち い せき
国史跡 青谷上寺地遺跡 ハンドブック

K A M I



J I C H I



青谷かみじち史跡公園

- ① 展示ガイダンス施設
- ② 弥生時代の湿地景観
- ③ 湿地のそばでくつろげる東屋
- ④ 体験用高床倉庫
- ⑤ 弥生のたんぼ
- ⑥ にぎわい交流ひろば
- ⑦ 弥生のはたけ



大量の人骨や弥生人の脳が見つかった溝

微高地
(弥生人の活動拠点)

青谷上寺地遺跡は紀元前5世紀～紀元4世紀にかけて海上交通の拠点として栄えた弥生時代の集落跡です。緑色に輝く玉、美しい木製の器などの、ものづくりが盛んで、北陸や九州北部などから訪れた人たちと交易を行っていました。道路の建設に伴い、平成8年度から発掘調査が行われ、保存状態のよい多種多様な遺物が見つかりました。弥生時代の歴史を知る上で重要な遺跡として、平成20年に国の史跡に指定され、令和元年には出土品のうち1,353点が重要文化財に指定されました。



1800年前の景観を復元したCG

青谷かみじち史跡公園では、展示や公園の散策、様々な弥生体験をとおして弥生気分を満喫できるよ!



マスコットキャラクター
あおや かみじろう



木製品などたくさんの遺物が見つかった様子

Boat

ふね 船 01



船をかたどった木製品。
用途は不明ですが、船の形や細部の特徴が正確に表現されています。

当時の人々が日本海を往来するのに使っていた準構造船(復元)。
全長約7m、5人くらい乗り込めます。



準構造船(復元)

青谷上寺地遺跡からは2種類の船の破片が出土しています。ひとつはスギの丸太をくりぬいた「丸木船」、もうひとつは丸木船に**縦板**、**舷側板**という部材をつけて船体を大きくした「準構造船」です。

丸木船は潟湖や近海での移動に使われていました。また、準構造船は外海を航海するのに適しており、交易などに使用されていたと考えられます。



木製の板に描かれた船の絵
大・中・小の船があったことがわかります
弥生時代中期後葉(紀元前1世紀ごろ)

02 こうえき 交易のネットワーク

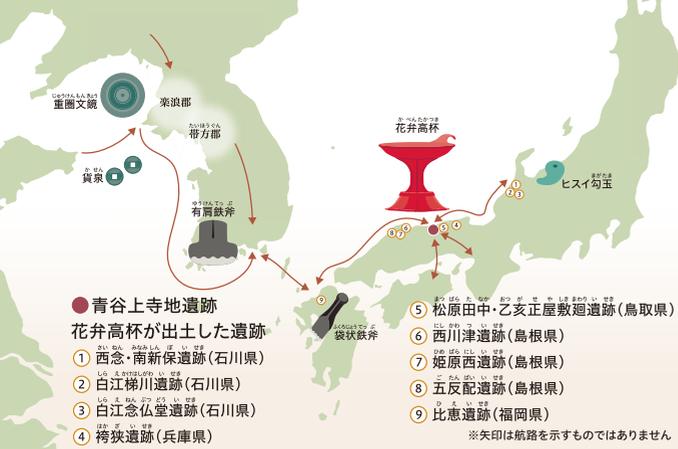
Trade Network

弥生時代中期の交易

- 青谷上寺地遺跡
- ▲ 管玉の原石の産地(石川県小松市善提)
- 勸島遺跡(韓国)



弥生時代後期の交易



港湾集落として発展した青谷上寺地遺跡は、交易の拠点としてにぎわっていました。

さまざまな地域から物や情報が集まり、さらに、青谷で作られた美しい玉や木製品が他の地域へ運ばれて行きました。

また、青谷上寺地遺跡から中国や朝鮮半島製の貴重な金属製品が出土しています。

弥生時代の青谷にくらしていたのは、海外にもつながるネットワークの中で活躍した人びとでした。

星雲文鏡
中国製・前漢(紀元前206～紀元8)の鏡



中国王朝「新」(紀元8～23年)を建国した王莽が発行した貨幣。他地域と交流を持つ弥生時代の遺跡から出土することが多い。青谷上寺地遺跡からは5点出土。

中国・朝鮮半島製の金属器



Pedestaled Bowls Engraved with Flower Petal-like Patterns

かべんたかつき 花卉高杯 03

青谷上寺地遺跡では、日常生活に使う木器とは別に、精巧で美しい木製容器を製作していました。主にヤマグワやケヤキの木から削り出されたこれらの品々は、儀式や交易に利用されていました。中でも紀元1～2世紀ごろに製作されていた花卉高杯は、北陸、山陰、九州北部の各地で珍重されたと考えられます。



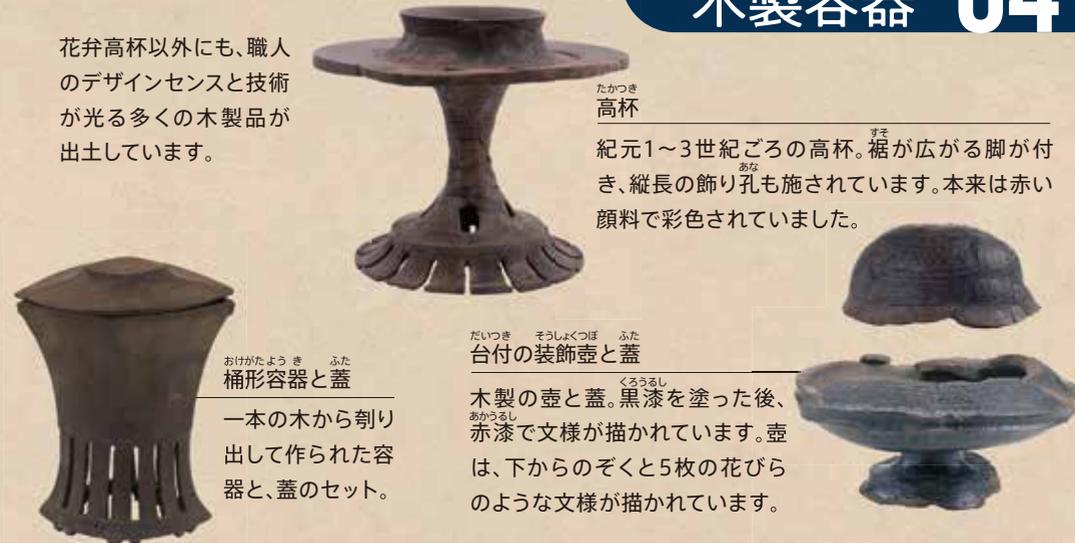
器の外側に花びらのような文様を彫りだし、口縁部に飾り耳・脚部に透かしを施し、赤く彩色した、優雅な器です。

杯部を下から見た写真

Wooden Vessel

木製容器 04

花卉高杯以外にも、職人のデザインセンスと技術が光る多くの木製品が出土しています。



高杯

紀元1～3世紀ごろの高杯。裾が広がる脚が付く、縦長の飾り孔も施されています。本来は赤い顔料で彩色されていました。

桶形容器と蓋
一本の木から削り出して作られた容器と、蓋のセット。

台付の装飾壺と蓋

木製の壺と蓋。黒漆を塗った後、赤漆で文様が描かれています。壺は、下からのぞくと5枚の花びらのような文様が描かれています。

銅鐸の破片
銅鍬などをつくる素材として近畿地方から運ばれてきました。



铸造鉄斧に板状鉄斧が差し込まれたもの



美しい木製容器や玉の製作は優れた道具に支えられていました。
木製容器の加工に不可欠な鉄の道具は、大陸や北部九州から運ばれてくる貴重な鉄を用途に応じて再加工して使っていました。
硬い石を加工する玉づくりでは、石の道具を用いて丹念に仕上げていました。

木を加工する道具



木の切り倒すための板状鉄斧

加工した木材の表面を滑らかに仕上げる刃物

木材加工用の斧

鹿角製柄付鑿

木材を削ったり、彫ったりする工具。シカの角で作られた柄には滑り止めの刻み目が施されています。



玉づくりの道具

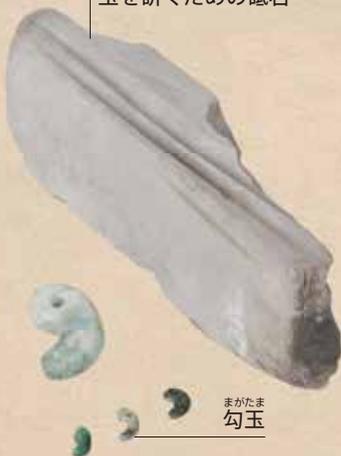
管玉の未成品



石鋸

石針

玉を研ぐための砥石



勾玉

青谷上寺地遺跡には、北陸地方から美しい石が集まりました。この石で作った管玉を遠く九州まで運び、貴重な鉄の道具と交換していました。
新潟県糸魚川産のヒスイの勾玉も見つかっています。



海のそばにある青谷上寺地遺跡からは、魚介類の骨や漁に使われた道具が出土しています。その漁場は内海・砂浜周辺だけでなく、沖合で大きな魚も捕っていました。
シカの角で作った釣針や鉾、木で作ったタモ粹など、使われた道具は現代のものと形がよく似ています。身近な素材を上手く加工して使っていたのですね。

結合式釣針

大きな魚を釣るため、ふたつのパーツを組み合わせてより大きな釣針に仕上げたもの

タモ粹

木の枝に網を取り付けて魚をすくうもの

離頭鉾頭

外海で大きな魚やクジラの仲間を仕留めるのに使用しました。

ラグーン (内海)

結合式ヤス

4本が水底に突き刺さった状態で出土。
4本セットで柄に固定して大きな獲物を突き刺して獲るもの



イワガキ



タイ



カツオ



サバ



カレイ

アワビオコシ

シカの角でできた、海の底の貝を獲るための道具。
現代ではステンレス製のものが使われています。

砂浜

ウニ

岩礁

外海



ハマグリ

アワビ

ハマグリ

弥生時代には本格的な米づくりがはじまりました。
青谷上寺地遺跡では田んぼの跡や米づくりにかかわるたくさんの
道具が見つかっています。

またくわ
又鋤

土を耕す道具



史跡内の田んぼで2023年に
収穫したお米(黒米・緑米)

すき
鋤

あぜ
畔を作ったり、
溝を掘ったりするときに
使います。



たげた
田下駄

ぬかるんだ田んぼの中に入るときの道具
足につける紐を通すため、板の上下に『えぐり』がある
もの(上)や、穴をあけたもの(下)があります。



いしほうちよう きほうちよう
石包丁・木包丁

稲穂を摘み取る道具。
かた
堅い木や石で作られ、
ほつまぐ
「穂摘具」とも呼ばれます。

よこつち
横槌

稲穂を叩いて
だつりゅう
モミの脱粒をする道具です。



土器は弥生時代の人々の生活必需品です。様々な形があり、食物の保存、
調理、盛り付けなど、用途によって使い分けていました。
装飾が施された華やかなものは、儀式などに用いられたと考えられます。



かめ
甕(弥生時代中期後葉)

なべ
お鍋のように、煮炊きに使用。
表面に黒いススがついているため、
火にかけていたことがわかります。



たかつき
高坏(弥生時代中期後葉)

食べ物を盛り付ける器。
『魏志倭人伝』には、「倭人は
高坏をもちて手で食事をし
ている」ことが記されてい
ます。



つぼ
壺(弥生時代後期後葉)

こくもつ
水や穀物を保管する容器です。



きだい
器台(弥生時代後期後葉)

壺など底が丸い土器を乗せる台です。

きゃくだいつき
脚台付の壺(弥生時代中期後葉)

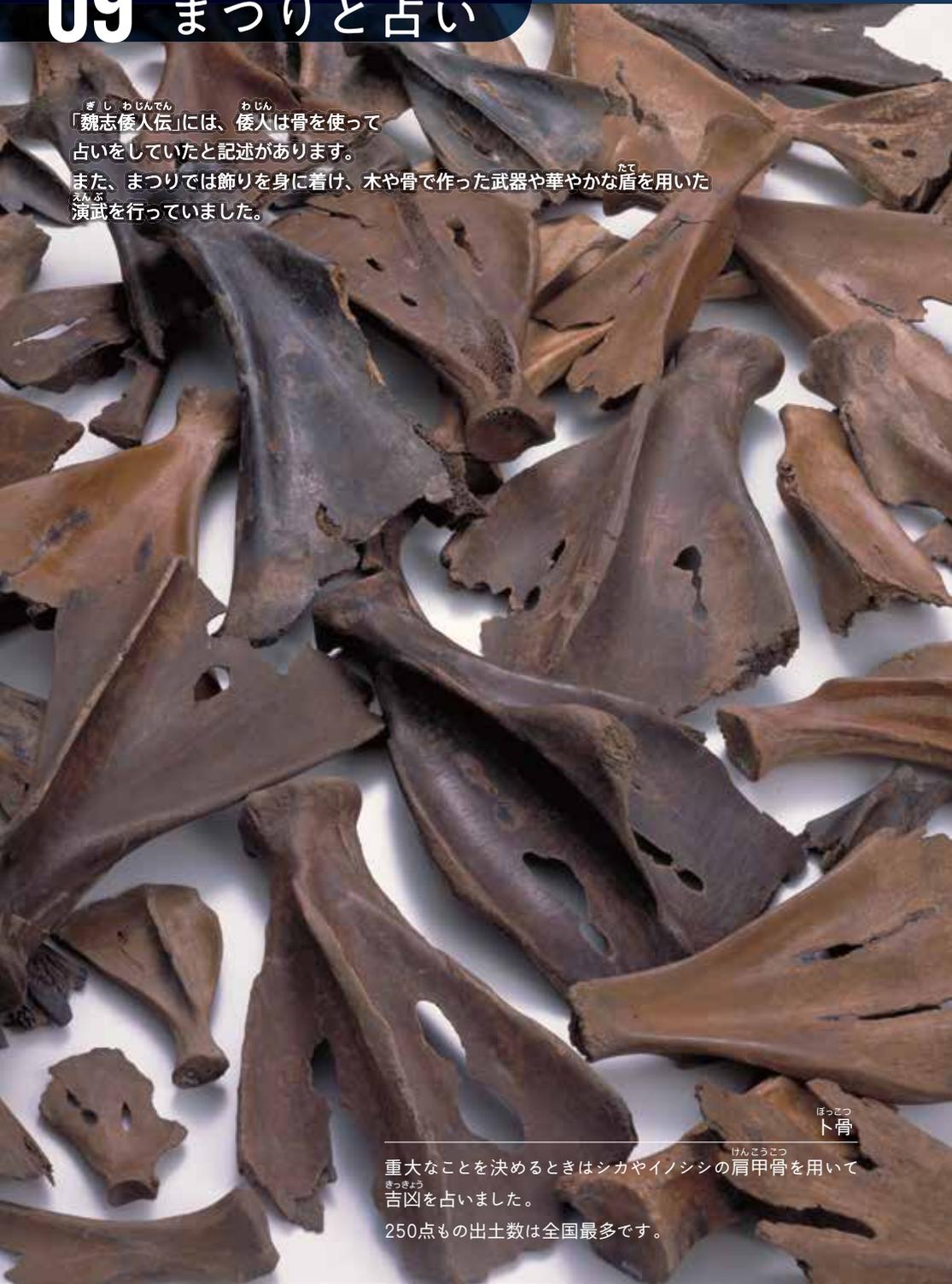
なみがた おうせんもん がんりよう
波形の凹線文と赤い顔料で飾ら
れた壺。胴部のふくらみと裾部の
広がりが特徴的です。



だいつき そうしよくつぼ
台付装飾壺

スタンプを連続的に押し
て
華やかな文様が施された祭祀用の土器です。





『魏志倭人伝』には、倭人は骨を使って
占いをしていたと記述があります。

また、まつりでは飾りを身に着け、木や骨で作った武器や華やかな盾を用いた
演武を行っていました。

重大なことを決めるときはシカやインシシの肩甲骨を用いて
吉凶を占いました。

250点もの出土数は全国最多です。

ほっこつ
卜骨



こと
琴

6枚の板を箱状に組み合わせた琴。
側板の孔は音を響かせる役割です。
『古事記』『日本書紀』では琴を鳴らして
神の御告げを聴いた、と記されています。



琴板

4本脚の動物が5匹描かれた琴の側板。
動物の種類は不明です。



器台

赤く彩色された三角の文様、
ボタンのような飾りが華やかです。

どうけんがたこっかき
銅剣形骨角器

青銅製の銅剣を模して
クジラの骨で作ったもの

か さや え か
戈（鞘と柄は出土品。戈は復元品）
横方向に振り敵の身体を引っかける
武器です。



たて
盾

渦巻きと三角の文様の周りを水銀朱で彩色した盾。
割れるのを防ぐため紐を通して補強していました。
美しい文様で飾られていることから
儀礼に用いられたものと考えられます。



10 あおや かみじち いせき 青谷上寺地遺跡の人々

The Bones Lying in Rest at the Aoya Kamijichi Site Belonged to People

2世紀後半にうまった溝跡から、たくさんの人の骨が出土しました。

その数は約5,300点(109体以上)におよび、鋭利な刃物による傷や、病気による変形が観察できる骨も見つっています。

中国の歴史書『後漢書』におさめられた「倭伝」には、紀元2世紀後半に「倭国大いに乱れる」と記されています。

青谷上寺地遺跡に眠っていたのは、激動の時代を生きた人たちでした。

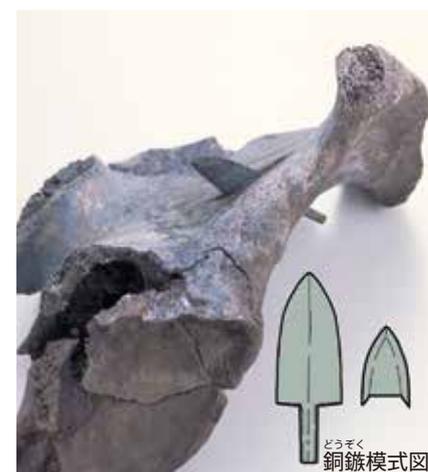


人骨のほとんどは、中心域の東側にあるSD38という溝から散乱した状態で出土しました。



傷を受けた頭蓋骨(第1頭蓋)

15歳くらいの男性。頭や顔の形は女性的だが、DNA分析によって男性であることが判明しました。
額に金属製の武器で攻撃された傷が残っています。



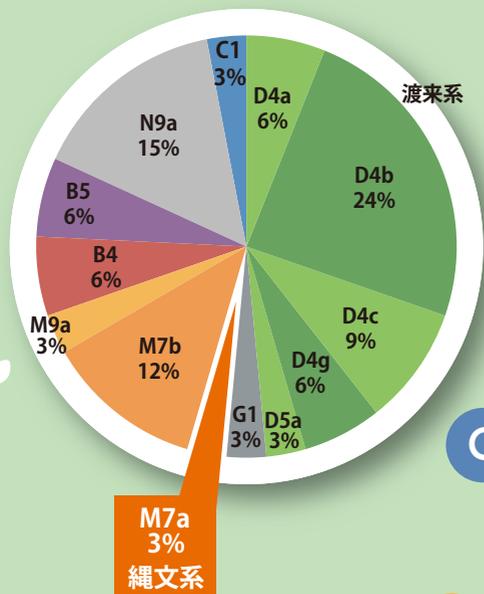
銅鏃が刺さった男性の寛骨(骨盤)

背後から矢で射られたと考えられる骨。
出土した人骨のうち、1割程度が武器で傷つけられていることから、激しい争いに巻き込まれたことが考えられます。

結核に感染した人の骨(国内最古の例)

結核で癒着・変形した背骨。
弥生時代に大陸から伝わった病気です。





ミトコンドリアDNAの分析から見えてき 都市的な集団像

紀元2世紀後半の人骨のミトコンドリアDNAを分析したところ、東アジアの各地にルーツをもつものも多くあることがわかりました。また、渡来系31個体に28系統の母系が確認されました。このことは、ほとんどの人が血縁関係になかったことを意味しており、その多様性はまるで都市部に集まった人のようです。紀元2世紀頃、青谷上寺地遺跡には、さまざまな地域から多くの人々が訪れていたと考えられます。

ミトコンドリアDNAの分析

母から子へと伝わり、同母のキョウダイのミトコンドリアDNAは塩基の配列が一致するので、母系のつながりを知ることができます。

青谷弥生人(青谷上寺朗)

脳が発見された男性の頭蓋骨(第8頭蓋)をもとに復顔した男性像。

DNA分析により、母系は渡来系、父系は縄文系であること、毛髪が太く黒々としていたことがわかりました。

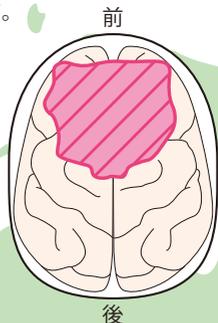


核DNAの分析

両親から伝わり、1人のヒトをつくるための遺伝情報となります。核DNAを分析した青谷上寺地遺跡出土人骨はいずれも現代の日本人と同じ集団に含まれることがわかりました。

弥生人の脳

3個体の頭蓋骨の中に脳の一部が残っていました。日本に現存する一番古い、貴重な脳です。



第8頭蓋に残っていた脳の範囲



用語集

『三国志』魏志倭人伝 — 中国の歴史書『三国志』の「魏志(魏書)」に書かれた倭の国ぐにや人に関する記述。紀元3世紀末に編さんされた。弥生時代後期、紀元2~3世紀半ばの日本の地理、社会、卑弥呼、邪馬台国のことなどが記されている。

『後漢書』東夷伝 — 中国の歴史書『後漢書』の「東夷伝」に書かれた倭の国ぐにや人に関する記述。『後漢書』東夷伝とも呼ばれる。紀元5世紀に編さんされた。紀元1世紀に奴国の王が後漢の皇帝から金印をさずけられたことや倭国大乱の年代に関する記載がある。

倭 — 弥生時代や古代の日本の呼称。

奴国 — 『三国志』魏志倭人伝にみえる国名。弥生時代の日本にあった国のひとつで、現在の福岡県福岡市付近にあったと考えられている。

倭国大乱 — 紀元2世紀の後半にかけて続いた倭の国ぐにによる争い。

卑弥呼 — 紀元3世紀前半に活躍した倭の女王。倭国大乱を経て、倭の国ぐにをまとめる王となる。鬼道(まじない)を使って、国を治め、後漢と外交を行っていた。死後大きな墓がつけられたと魏志倭人伝に記されている。

内海 — 陸地に囲まれた水深の浅い水域。外海とつながっていて波もおだやかなため、青谷上寺地遺跡では港として利用していたと考えられる。

